

保存

越前杉平家展

の什部宝

昭和五十三年度秋季特別展



1  
7  
3

昭和五十三年秋期特別展

越前杉本家展

— 什宝の部 —

解説総目録

## はじめに

昭和五十二年十二月十四日、旧福井藩主越前松平御本家は、同家御所蔵の文書・記録類並びに伝家の重器類等多数を、当館へ御寄託下さった。総件数三百余、目下整理中のこととて正確な点数は未だ不明であるが、千点を遙にこえる膨大なものである。

越前松平家の各種史資料は、これまで明治四十二年に福井市立図書館に御寄贈下さったもの（藩校関係の書籍が中心）、昭和二十五・三十四年に福井県立図書館に御委託のもの（藩政史料中心。「松平文庫」、更に昭和四十五・四十九年の両度にわたり御分家の松平永芳様から福井市に御寄贈いただいたもの（松平春嶽公関係史料中心。当館の主力収蔵史料である「福井市春嶽公記念文庫」が知られているが、この度、猶東京の松平御本家邸に保存されていた残余の史資料の殆どを、当館に御寄託下さったものである。

これによって、旧福井藩関係の史資料は、すべて郷土福井の各施設に大切に保管されることとなった訳で、殊に今回御家重代の宝器をも惜しげなく御預け下さった御英断と御厚意には、深い感動を禁じ得ず、深甚の謝辞を申上げる次第である。

当館では、史料的に貴重な記録・古文書も数多く、越前家第一の重宝「初花の茶入」（本書⑥解説参照）や、忠昌公の「片鎌槍」（同⑨参照）をはじめとする稀代の名品が含まれたこの史料群を、「越葵文庫」と名付け、一点／＼慎重に分類・修補の手を加えつつある。整理を完了して「越葵文庫」の全容を

明らかにするためには、まだ若干の月日を要するが、取敢えず全史料を什宝と文書の二部に大別し、それ／＼の部門の主要史料を展示公開する二度の特別展を開催し、広く一般市民に紹介すると共に、松平家の御芳情に御こたえすることとした。

今回の特別展は、その題名が示すように、まず比較的整理のすすんだ「什宝」の部に属する史資料を展観するもので、以て天下に名立たる越前の勇壮な藩風や、藩主及び夫人達の高尚な趣味・教養、先祖以来の武勇を誇りとした諸藩士の面目、御抱諸職人の天下一級の技術等々を御理解いただければ幸甚である。

最後に、「越葵文庫」の貴重史料が、今後当館の充実には勿論、郷土及び全国各分野の研究者からも、非常な注目をあつめるであろうことを付記すると共に、門外不出の御秘蔵史料を御提供下さった越前松平家に対し、改めて心からの敬意と感謝の意を捧げる次第である。

昭和五十三年十月一日

福井市立郷土歴史博物館

## 凡 例

一、本書は昭和五十三年十月一日より十一月五日までを会期とする、昭和五十三年度秋季特別展「越前松平家展―什宝の部―」の解説目録である。

一、本目録は、前半部に主要展示史料の写真を収め、後半部には展示史料を「歴代藩主関係」「武器類」「調度品類」「その他の什宝類」の四部門に分類し解説してある。

また、「歴代藩主関係」の項は、更に各藩主毎に細分してある。

一、後半解説部分の各史料に付した「史料通し番号」は、本目録内の写真に付した番号とすべて一致し、福井市立郷土歴史博物館に於ける実際の展示品に付した史料番号とも共通している。

一、史料番号①より㊾までの全収録（展示）史料は、すべて昭和五十二年十二月十四日、越前松平御本家松平宗紀氏より当館へ寄託された「越葵文庫」中より選り出したものであるから、各史料には、いち／＼所蔵者を明記しなかつた。

一、会期中、本目録内の史料の展示換えや、目録以外の史料を展示することもある。

（本目録題字は、石川瑞陽筆。また表紙カラー図版は、史料番号㉔「葵紋散菊花唐草模様蒔絵重箱」の部分である。）





⑥初花の茶入



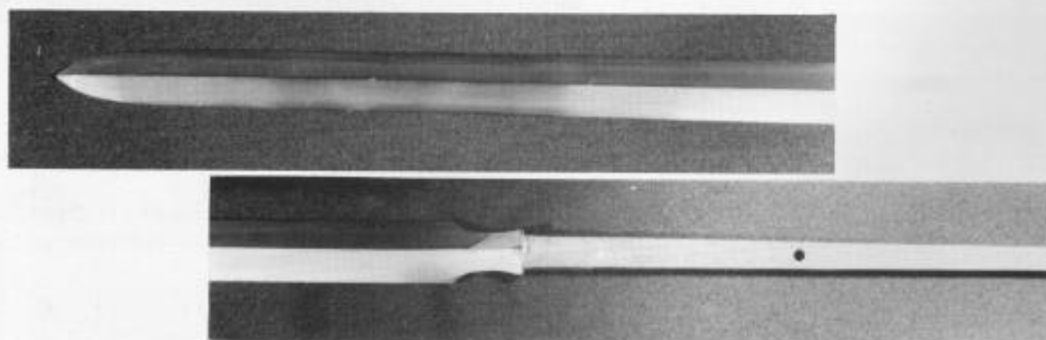
⑧ 葵紋散菊花唐草模様蒔絵重箱



①初代結城秀康筆「安国」の書幅



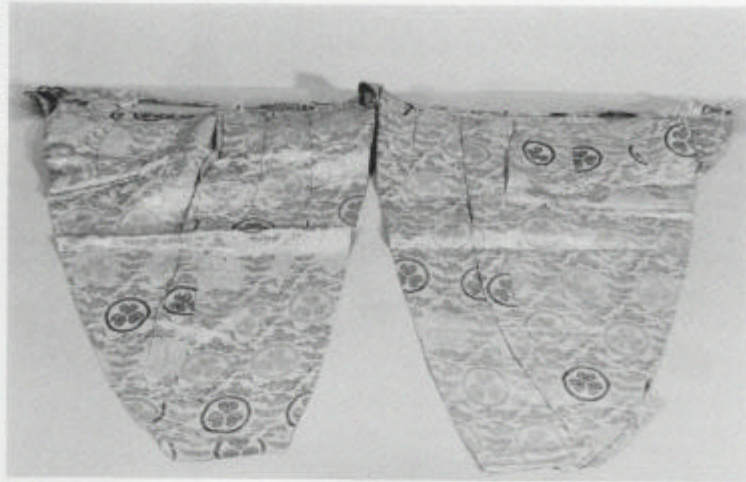
②初代秀康筆「観無量神力」の書幅



③初代秀康所用素槍 銘 越前住筑後守藤原包則

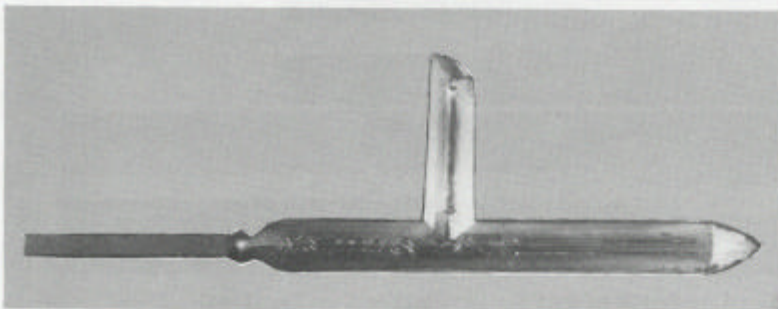
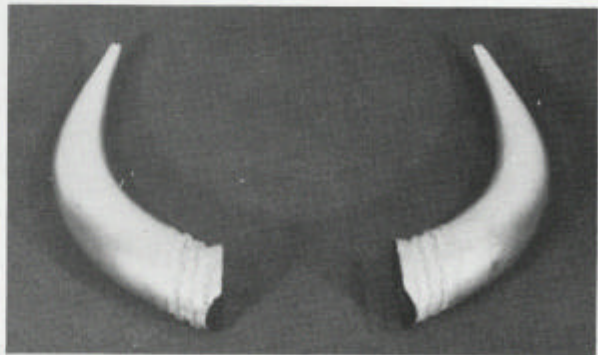


④初代秀康着用  
葵紋散雲形模様錦  
具足下袴

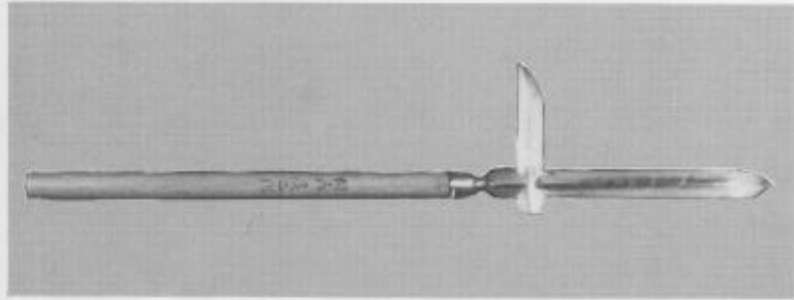


⑦真田幸村所用  
血付采配

⑩三代忠昌所用  
金牛角形兜前立物



⑫三代忠昌所用 片鎌槍  
銘 相州住助広



⑨三代忠昌 大阪夏の陣に所用の片鎌槍  
 銘 相州広正



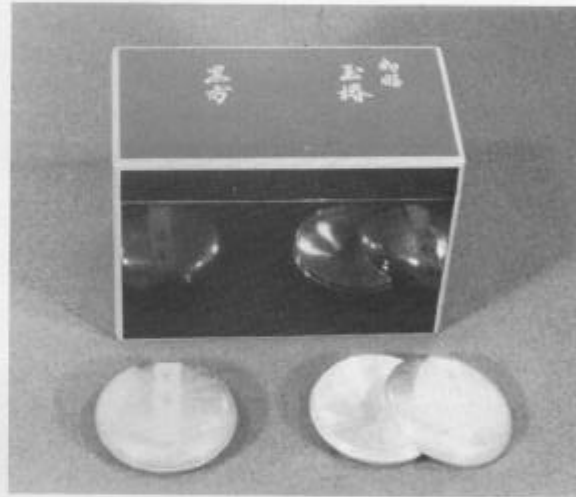
⑩念立左太夫所用  
 頰 当



⑪四代光通並びに乳母長光院肖像画

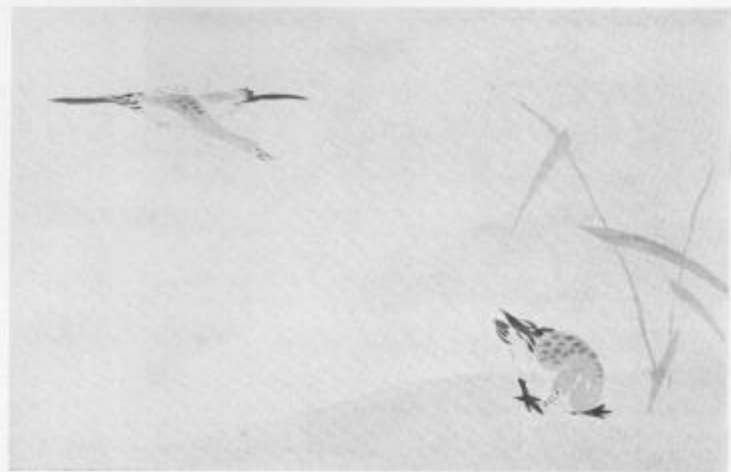


⑯四代光通夫人 国姫書翰



⑱勅賜 菊花紋様銀製香合

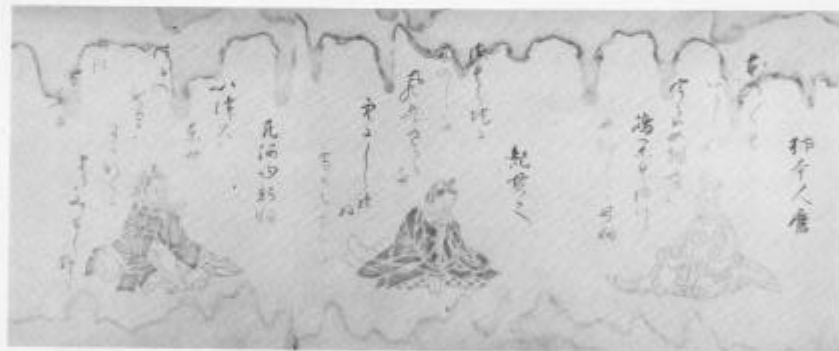
⑳八代吉邦筆 赤染衛門の図



㉑八代吉邦筆 芦雁の図



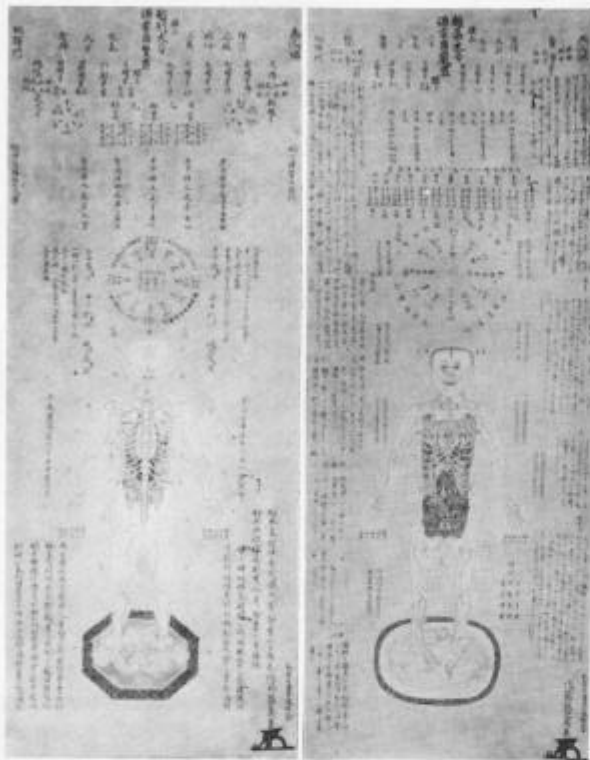
⑳八代吉邦筆 鶴の図



㉑八代吉邦筆 三十六歌仙和歌の巻軸



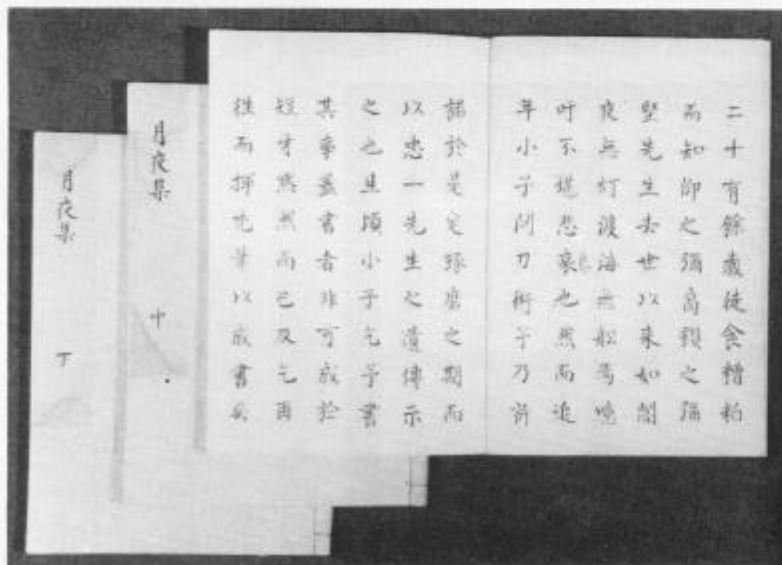
㉒八代吉邦筆 和歌色紙



②⑧楊心流圖 前・後卷



②⑦九代宗昌筆「中秋」の詩歌幅



③④十代宗矩著・筆「刀術月夜集」



③①十代宗矩筆「鶴舞千年樹」の書幅



③⑩ 十代宗矩筆 「寿老人」「松鶴」「竹鶴」の画幅



④① 十三代治好夫人定姫筆 和歌幅



③⑧ 十三代治好筆 「渭水東流去」の書幅



③⑥ 十一代重昌筆 「花明五嶺春」の書幅



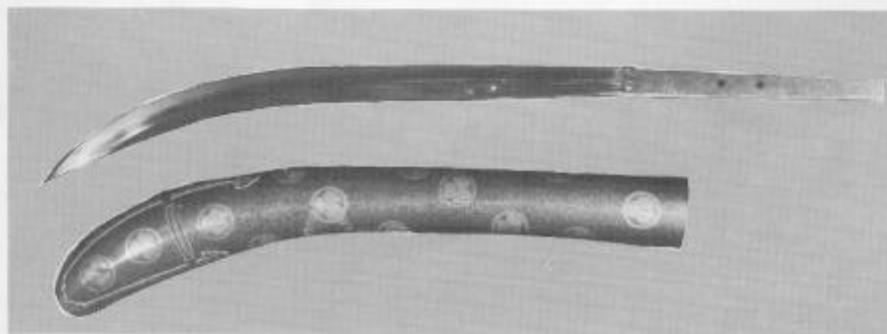
④③定姫筆「鴛鴦」の画幅



④②十三代治好夫人定姫筆「牡丹に軍鶏」の画幅



④④翁模様革文庫入 定姫遺品

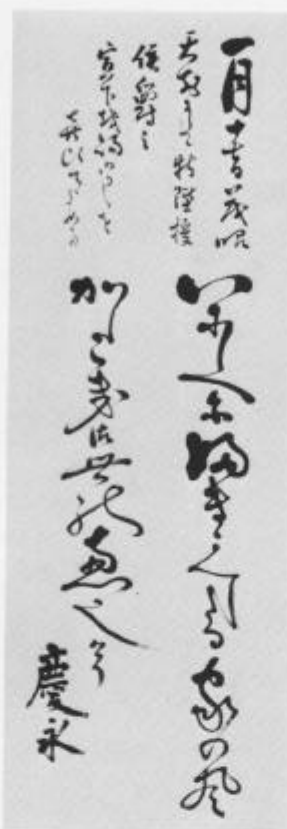


④⑥十四代齊承夫人浅姫所用 薙刀  
銘 藤原国常

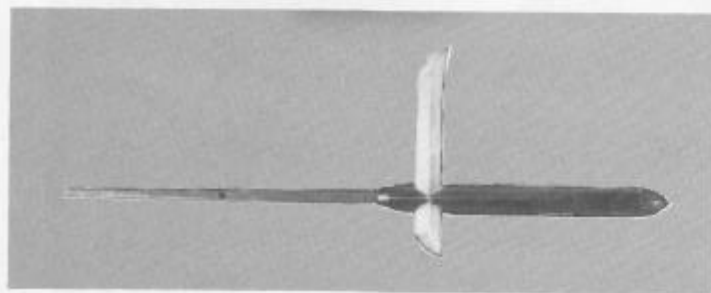
④十六代慶永（春嶽）肖像画 波々伯部捨四郎筆



④十六代慶永筆 「嗣子茂昭拜候爵喜て賦」の書幅

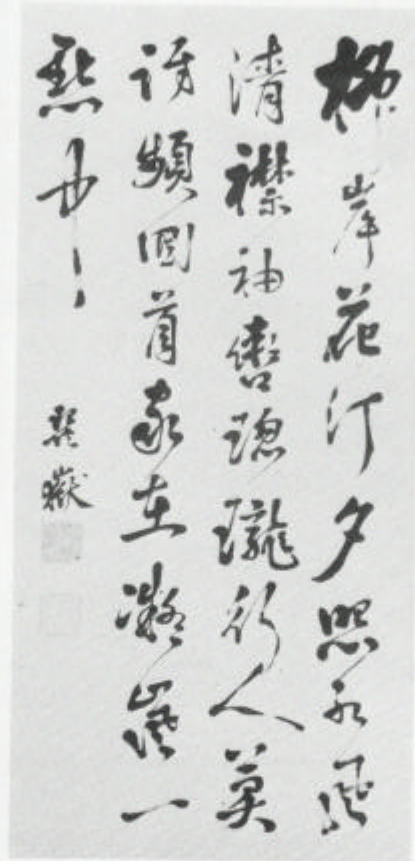


⑤金梨子地菊水模様蒔絵箱入 源氏物語 慶永夫人勇姫所用



⑥十七代茂昭所用 片鎌槍 銘 越前住 播磨大掾藤原重高



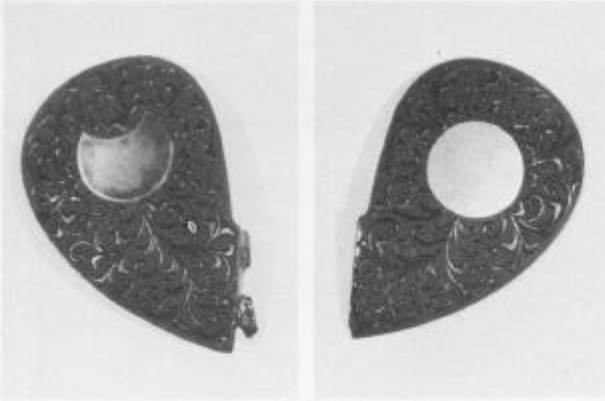


54 十七代茂昭肖像画  
波々伯部捨四郎筆

55 十七代茂昭筆「柳岸花汀夕照水々々」の書幅

56 慶永・茂昭一族寄書の幅

武具類

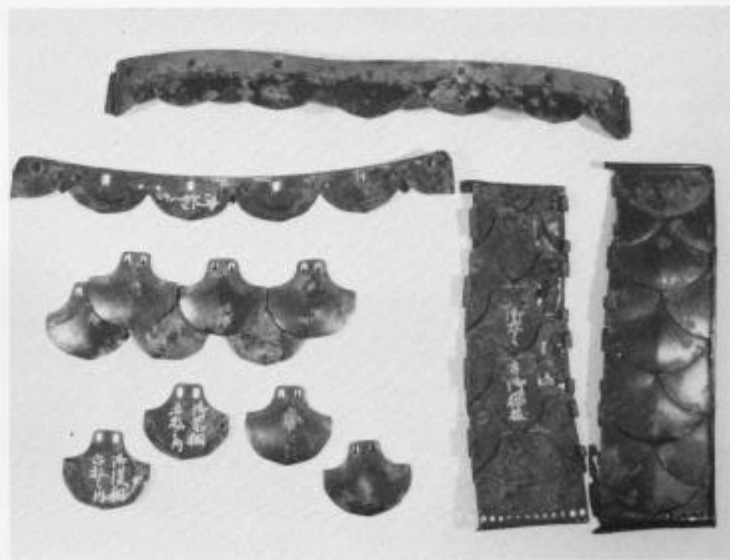


⑥1 兜吹返 赤銅魚子地唐草模様  
金銀日月象嵌

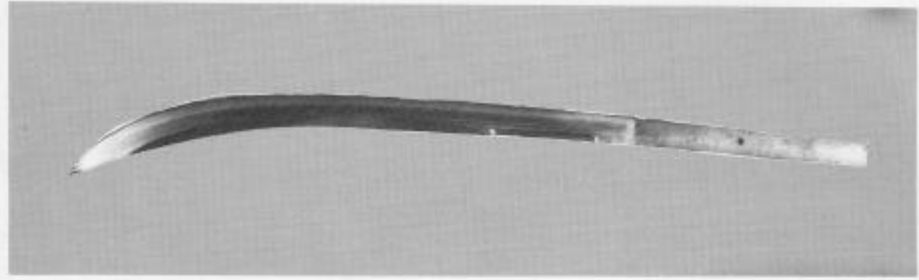


⑥9 御抱甲冑師  
明珍吉久作 魚鱗具足

⑥2 鉄製金象嵌 鳥翼形具足残片



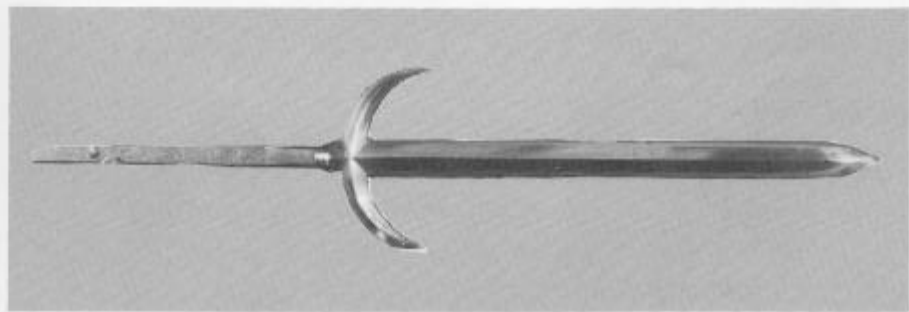
⑥0 同上 残片  
鉄錆地塗魚鱗形小札



⑥③ 薙 刀  
銘 元禄三年二月吉日 長曾祿興正作之



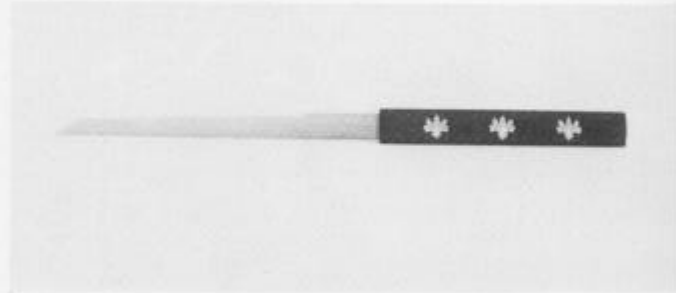
⑥④ 葵紋付緋色羅紗製 薙刀袋



⑥⑦ 「月劍」槍 伝三條小鍛治作



⑦②小刀 銘 長曾祿興里入道虎徹



⑦⑤小柄 赤銅魚子地金桐紋付

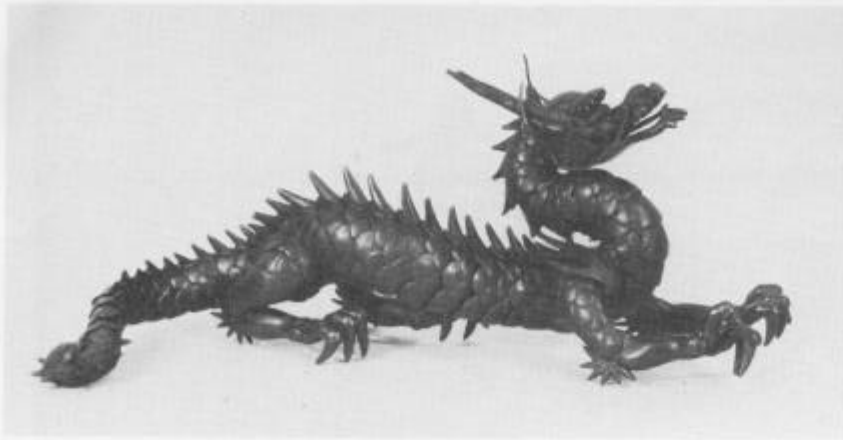


⑦⑥⑦⑦鷹狩用 小刀 柄・鞘 紫檀製。銀魚子地金具付

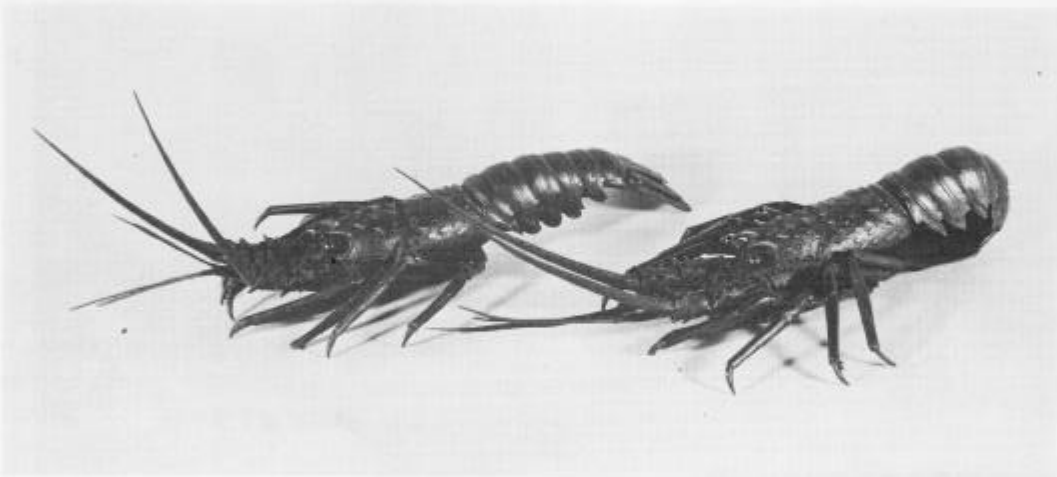
調  
度  
品  
類



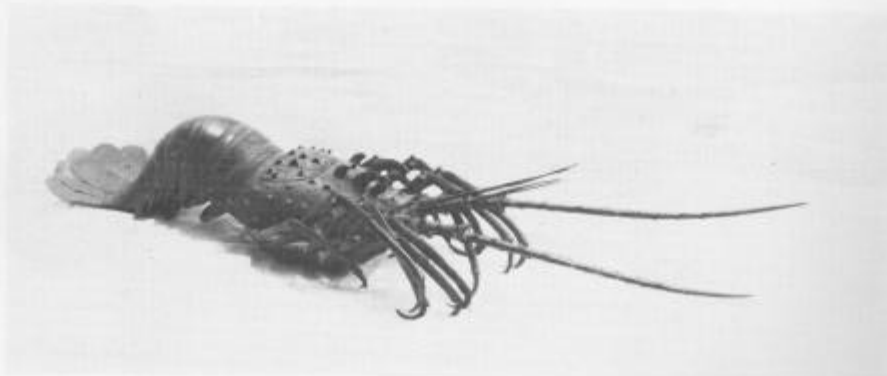
⑦鉄製龍置物（同部分） 御抱甲冑師 明珍吉久作



⑦⑨ 鉄製龍置物（文鎮） 明珍吉久作



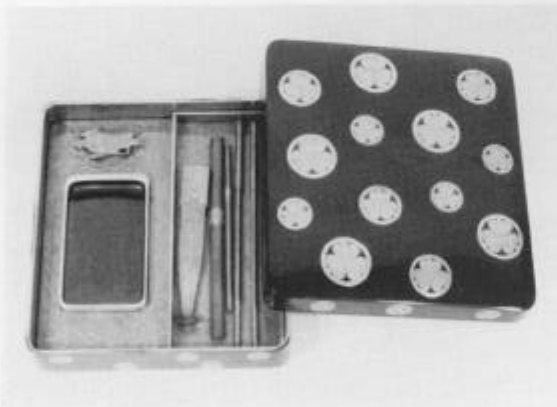
⑧⑩ 鉄製 海老置物（文鎮） 明珍吉久作



⑧⑪ 銅製海老香炉 明珍作



⑧②唐金製 鳳凰飾金具付花籠形花生



⑧⑦黒漆地金葵紋蒔絵硯箱



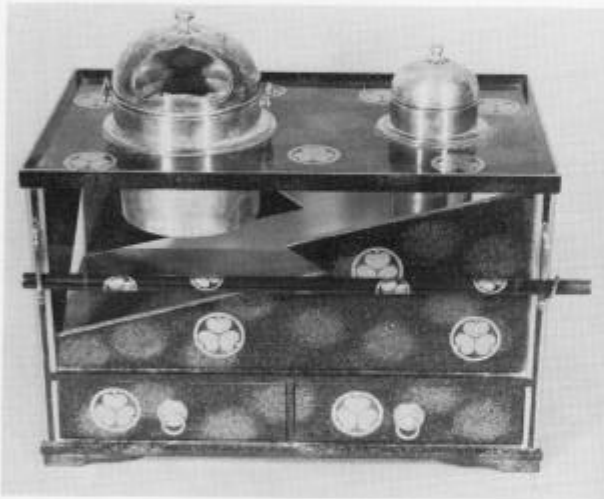
⑧⑤葵紋散桐花唐草模様蒔絵色紙箱



⑧⑥葵紋散菖蒲流水模様蒔絵御目錄箱



⑧⑨ 黒漆地金泥鶴亀流水模様木盃  
伝 甲州武田家所用



⑧⑩ 村梨子地葵紋散 煙草盆



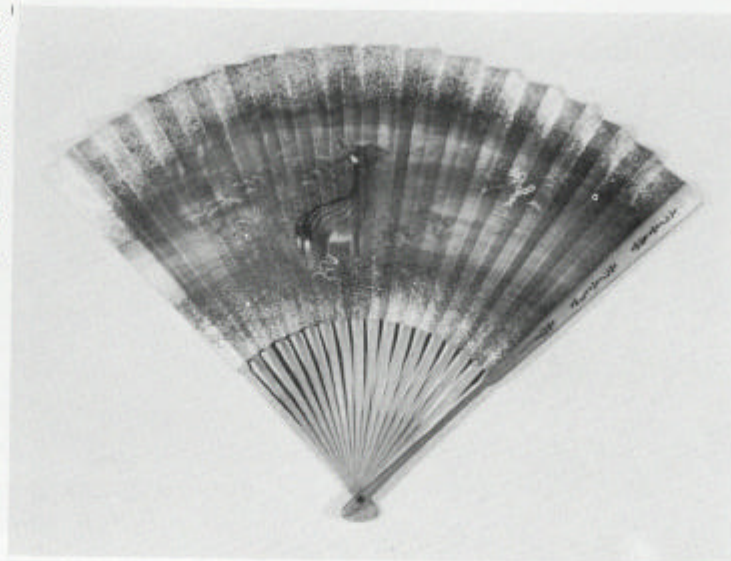
⑨⑩ 八代將軍吉宗所用 素焼 土瓶



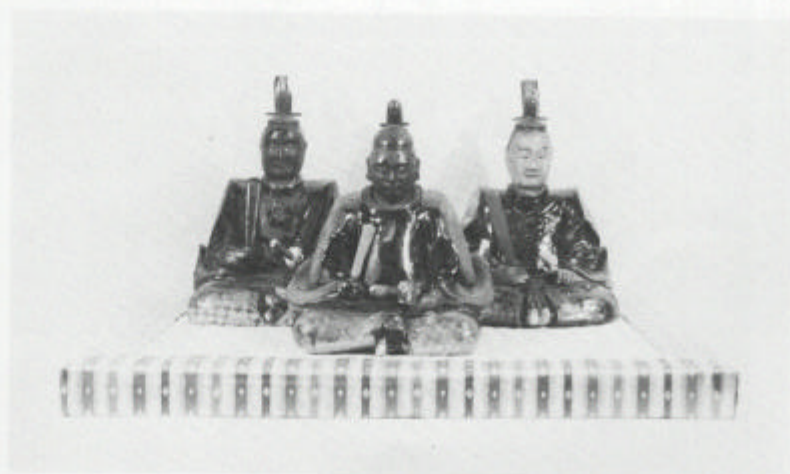
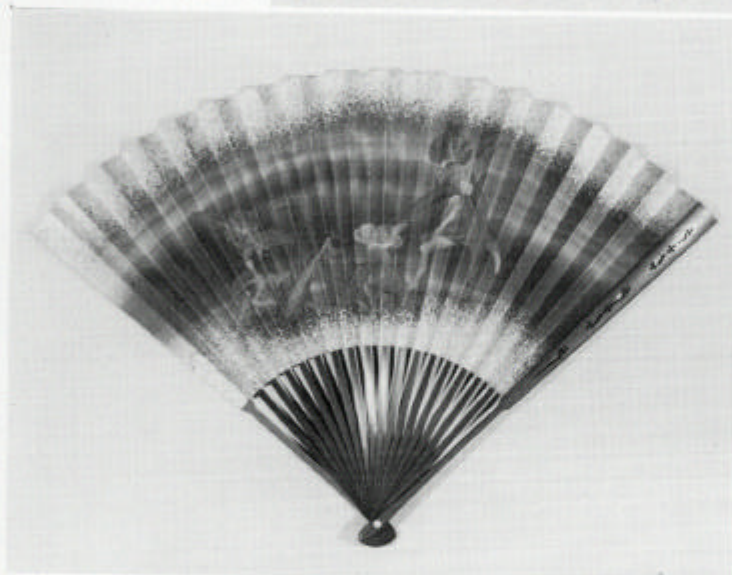
⑨⑩ 八代將軍吉宗所用 青地錦小型巾着入虎の爪



その他の什宝類



② 光格天皇御所用御扇子  
円山応挙筆。  
雄鹿の図・蟻螂の図



④ 福井歴代藩主座像



⑨③ 太田道灌所用 琵琶  
銘「千鳥」



⑨④ 福井城郭各御門其他見取絵



⑨⑤ 福井藩主並びに一族筆 和歌等巻軸



⑨⑨ 爆竹調馬（馬威）の図絵



⑩ 二代將軍秀忠筆  
和歌色紙



⑨⑥ 福井藩主所用 具足下袴

昭和五十三年度秋季特別展

越前松平家展

― 什宝の部 ―

解説総目録

歴代藩主関係

初代 結城 秀康

○徳川家康の二男として、天正二年（一五七四）に生まれる。同十一年、小牧長久手の戦の後、豊臣秀吉の養子となり、更に同十八年下野国結城（茨城県結城市）の名族結城晴朝の養子となって、結城十万石を相続し、結城宰相と称した。

慶長五年（一六〇〇）、関ヶ原の合戦に秀康は下野国小山（栃木県）に布陣して上杉景勝に備え、その功によって一躍越前六十八万石の大々名に任ぜられ、翌年北ノ庄（福井市）に入城、柴田勝家以来の北ノ庄城を大幅に改築して規模を拡張すると共に、城下町を修築し、名ある武将を始め一芸一能あるものを広く天下に求め優遇し、類を見ない雄藩を作り上げたが、慶長十二年（一六〇七）三十四歳で歿した。

秀康に対しては、諸大名も弟の身で二代將軍となった秀忠に対すると同等の礼をもつてのぞんだので、越前家は他の大名とは別格の扱いをうけ、「御制外の家」と呼ばれるに至った。

① 結城秀康筆 「安国」の書幅 一幅

② 右 同 「観無量神力」の書幅 一幅

③ 結城秀康所用 素槍 一振

銘 越前住筑後守藤原包則

④ 結城秀康着用 葵紋散雲形模様錦 具足下袴 一着

⑤ 結城秀康着用 黒絞付綿入羽織 一着

二代 松平 忠直

藩祖結城秀康の長子。文祿四年（一五九五）に生まれ、慶長十二年（一六〇七）十三歳で藩主となる。慶長十九年・翌元和元年の大坂冬・夏の陣には、越前藩兵凡そ一万五千を率いて参戦、ことに夏の陣では、大阪城内一番乗りの功名をたてた。また当時荒涼とした原野であった鳥羽野（現福井県鯖江市神明地区）の開拓を進め、開拓民の諸税を免除するなど、仁政を施したことで知られている。

しかし、その後不祥事が続き、幕府の忌むところとなって、ついに元和九年（一六二三）二十九歳の時、幕命により豊後国（大分県）萩原に流され、二十七年後五十六歳をもって同国津守で歿した。菊池寛の著名な小説「忠直卿行状記」は、後世の言伝えを元にしたもので、豊後送りの真因を示す正確な史料は発見されていない。

⑥ 初花の茶壺 一壺

元和元年（一六一五）五月、忠直は藩兵一万五千を率いて大阪夏の陣に参戦、重立った敵の首四百七十余級をとり、大阪城内へ一番に突入するなど、諸侯中第一の戦功をあげた。その功を賞した徳川家康が、恩賞として忠直に贈ったのが、この秘蔵の茶入である。ひびわれを修補したあとがあるのは、

帰陣後忠直がこの恩賞では、決死の奮戦をした群臣に報いようなしとして、投捨て破損したものであると伝えられる。古来、越前松平家第一の重宝として名高い名品である。

「初花」との銘は、姿や釉色が端整優美で、天下の春にさきがけする初香の名花のようであるとして、名付けられたものという。また外箱蓋裏に「花藤四郎御壺」とあり、藤四郎の茶入、即ち瀬戸の二代藤次郎基通（真中古）の作として伝来したものであることが知られる。

〔松平慶永春自筆田緒書〕  
茶入箱蓋上に記されたもの

大阪夏御陣御戦功二付、従<sub>二</sub>東照宮御手自西岸院殿<sub>ナリ</sub>御拝領の處、群臣ノ功劳ニ賞与スベキもの無<sub>レ</sub>之とて、此壺ヲ御玄関ノ前<sub>ニ</sub>御抛却相成、後修補して当家の第一の重宝トナルナリ。

明治六年六月

十五代孫正二位松平慶永（花押）

- ⑦ 真田幸村所用 血付采配 一握
- ⑧ 右 同 薙刀 一振

⑦⑧ともに、元和元年（一六一五）の大阪夏の陣関係の戦利品である。二代藩主忠直は、夏の陣に越前藩兵一万五千を率いて参戦、大阪城一番乗りの功名をたて、藩士達もそれぞれ目覚しい活躍をした。中でも西尾仁左衛門宗次は、敵の首十三をとり、更に茶臼山の合戦で敵将真田幸村を討取って武名を高め、七百石から一躍千八百石に増加された。

この二点の武器は、西尾宗次が幸村を討取った際の分捕品と伝えられ、采配の柄には朱漆で「真田幸村血付采配」との銘がある。

### 三代 松平 忠昌 ただまさ

初代藩主秀康の次子として、慶長二年（一五九七）十二月十四日、大阪に生まれた。

忠昌は大阪夏の陣（元和元年六月）に兄忠直と共に出陣、大奮戦し、その功により常陸国（茨城県）下妻三萬石を与えられ、更に元和五年、越後（新潟県）高田二十五萬石に封ぜられた。しかし、兄忠直が豊後国（大分県）萩原に配流となつたため、寛永元年（一六二四）三月一説に四月幕府の命により越前松平家を相続し、三代藩主に就任した。

寛永元年（一六二四）七月、入国した忠昌は、それまでの「北ノ庄」（福井の旧称）に「逃ぐる郷」の訓があることを忌み、居城地を福居（のち福井）と改めた。

寛永三年九月、同十一年七月、将軍家光の上洛に供する一方、京都より百工を召し、鎧・刀・弓矢・鳥銃その他の兵器をつくらせる等、武備に力を入れ、一流の武芸者を召抱えて、藩の尚武の気風を高めた。

正保二年（一六四五）八月一日、江戸浅草の藩邸において、四十九歳で歿した。

### ⑨ 片 鎌 槍 銘 相州広正

元和元年（一六一五）五月、大阪夏の陣の際、藩主忠直の弟として十七歳で参戦した忠昌が、自ら敵三人を突伏せる武功をたてた槍である。

この戦斗で忠昌は、越前勢の先頭をきって敵陣へ突撃し、この槍をふるって抜群の勇猛ぶりを發揮した。殊に、大阪城桜の門から城中一番乗の後、忠昌に一騎討ちを挑んだ念立左太夫は、大阪方でも第一の大兵強力の豪傑として名高く、忠昌は念立と戦う内に、十文字槍の片方の鎌を打ち折られる程

であった。忠昌は、家臣の助けを得てようやく念立の首を取ったが、以来激戦の内に欠損したこの槍は、藩主自ら乱戦の中に勇戦したことを示す名譽の標章として、越前家の供立行列の際、かざし歩くことが通例となったものである。

⑩念立左太夫所用 頼当（はなまき） 一点

忠昌が討取った大阪方の剣客念立左太夫が、討死の際着用していたものである。⑨に示した相州広正の槍を振って念立と奮戦した忠昌は、一時念立に組伏せられる程の苦戦に陥った。その時、忠昌の傍にいた吉田五左衛門は、念立を背後から組みとめ、忠昌に自分と共に敵を刺貫くようお願い、遂に念立の首級をあげることが出来た。

五左衛門の決死の忠義心に感激した忠昌は、その場で五左衛門にこの頼当を与えて後日の証據とし、のち忠昌の馬の口取という軽輩であった五左衛門を、二百石取りの士分に取立てた。

⑪松平忠昌所用 金牛角形兜（かぶと）前立物 一对

⑫右 同 片鎌槍 銘 相州住助広 一振

⑬二代將軍家光公御上洛の図 二卷

⑭後水尾天皇行幸于二條城の図 二卷

⑬⑭ともに、寛永三年（一六二六）上洛した將軍家光が、二條城に後水尾天皇をお迎えした際の行列の様を描いた絵図である。⑬には「明治十七年七月、鈴木重嶺ヨリ御買入」との付箋があつて、もと幕臣で国学者・歌人として著名な鈴木重嶺の蔵品であつたことが知られる。

図中、この行幸に供奉した三代福井藩主忠昌の姿が見える。

#### 四代 松平 光通（みつみち）

寛永十三年（一六三六）福井三代藩主松平忠昌の嫡子とし

て生まれ、正保二年（一六四五）父忠昌逝去の後、四代藩主となる。光通は、家中定十六ヶ條、保民の規定三ヶ條、寺院造作制限令六ヶ條など諸制度を發布し、藩の内政を充実せると共に、文教にも力を尽し、京都より儒医伊藤坦庵を招いて藩士の教育にあたらせ向学の氣風を養わせると共に、名僧大愚禪師を招請して大安寺を建立、また万治三年（一六六〇）には、新田義貞の戦歿地に新田塚を建立するなど、士風の高揚にもつとめた。

この間、寛文九年（一六六九）の大火で、天守閣を始め福井城の過半が焼失し、以後天守閣は再建されなかつた。

光通の施政は、温順にして慈愛に満ち、領内の崇敬を集めたが、延宝二年（一六七四）三十九歳の時、突然自刃して世を去つた。

⑮松平光通並びに乳母長光院肖像画 二幅

光通の乳母長光禪尼の子美濃部半七は、光通の卒去後出家して、近江国（滋賀県）志賀郡穴生田村に円光寺という一寺を建立し、終生主君と母の菩提を弔つた。この画像は、右の円光寺に伝えられたものの写で、幕末松平春嶽の側近中根雪江が、絵心のある藩士佐々木長淳（権六。福井藩最初の洋式船建造者）に命じて、筆写させたものである。

⑯松平光通夫人国姫書翰 一幅

光通夫人国姫は、二代藩主忠直の子光長（越後高田藩主）の女で、明暦元年（一六五五）四月十三日、光通に嫁した。眉目秀麗で知性深く、光通と琴瑟相和したが、事情あつて寛文十一年（一六七二）自殺した。和歌に秀で、その歌人としての名声は京都までも聞え、「東小町」と称され絶讃を博した。本書翰は、そうした国姫の流麗な筆蹟をしのばせる珍しい

もので、宛名の「兵部」とは吉江藩主（福井支藩鯖江近郊）兵部大輔昌親（のち五代福井藩主。光通弟）のことと思われる。

### 五代（七代）松平昌親（吉品）

寛永十七年（一六四〇）福井三代藩主松平忠昌の末子として福井に生まれる。父の逝去後、吉江（鯖江）に二万五千石の分封を受け、吉江居館を構えたが、延宝二年（一六七四）四代藩主光通（兄）の遺言により、五代藩主に就任した。しかし、光通には妾腹の子直堅があり、松岡には光通の庶兄昌勝がいて、昌親の相続は順位を乱すものとして、藩内に動揺があった。このため昌親は、まもなく兄昌勝の子綱昌を養子とし、延宝四年（一六七六）在職二年にして隠居した。

こうして六代藩主となった綱昌は、悪病のため政務を見る事が不可能となり、これが幕府の忌むところとなって、貞享三年（一六八六）蝨塞を命ぜられ、藩領は半減して二十五万石となった。これを「貞享の大法」という。

一旦隠居していた昌親は、幕命により再び藩主（七代）の座にもどり、吉品と改名して減封後の藩政立直しに努力し、正徳元年（一七一）七十二歳で歿した。

### ⑰勅賜 古今和歌集

宝永六年（一七〇九）六月十一日、七代藩主吉品が、No⑱の銀製香合入「香」と共に、讓位十日前の東山天皇より拝領したものである。中箱蓋裏に左の由緒書がある。

宝永六己丑年六月十一日、奉<sub>レ</sub>賀<sub>二</sub>遷幸<sub>一</sub>院參之節、於<sub>二</sub>公卿之間<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>伝奏梅小路中納言共方卿・藤谷中納言為茂卿<sub>一</sub>、勅<sub>レ</sub>誕有<sub>レ</sub>之、両品拝領之御薰物御手重之処、以<sub>二</sub>厚悃

之院宣、忝賜之旨、兩卿被<sub>レ</sub>演達<sub>レ</sub>之、仍誌焉。

### ⑱勅賜 菊花紋様銀製香合

No⑰の「勅賜古今和歌集」と共に、七代藩主吉品が拝領したものである。もとは、この二点の香合に玉椿・黒方の銘がある香を収めた棗形香入が付属していたが、現在は破損して原形を止めない。

### 八代 松平吉邦

越前松岡藩主昌勝の第六子。延宝八年（一六七八）十二月、江戸浅草に生まれ、元禄十四年（一七〇二）三月、七代藩主吉品（五代昌親）の養子となり、宝永七年（一七一〇）七月五日、養父吉品が致仕隠居したのに伴い、第八代藩主に就任した。

福井入国を前にした吉邦は、国許の重臣に減封後の節約整理の方策を協議させ、入国後の正徳元年（一七一）十一月には、簡略令を発し、藩士一統や、領民へ大規模な節約を命じた。また藩士の衰退した風儀を厳戒し、学問武技を勧めるなど、藩政立直しに努力する一方で、土風の高揚につとめた。その施政は藩民の深い信望を集めるところとなったが、享保六年（一七二一）十二月四日、病のため四十二歳で歿した。

### ⑲松平吉邦筆 芦雁の図 絹本墨彩

⑳ 右 同 赤染衛門の図 絹本著色

㉑ 右 同 鶴の図 絹本著色

㉒ 三十六歌仙和歌の巻軸

八代藩主松平吉邦が、所謂三十六歌仙の和歌を一人一首ずつ書写し、一卷としたものである。書体も流麗であるが、それにも増して料紙の見事さが目を驚かす。即ち、生漉の厚手

鳥子紙の天地に藍と朱の紙素で打雲を施し、更に柿本人麿に始まる三十六名の歌仙の肖像を、型紙を用いて中央に漉掛け  
たもので、越前抄紙技術の粋を集めた工芸品と言える。

②③ 松平吉邦筆 和歌色紙折本

一帖

②④ 和歌色紙

六包二〇六葉

八代藩主吉邦が揮毫した和歌の色紙類で、二百六葉が伝えられて  
いる。料紙はいずれも当時の越前和紙を代表する打雲・墨流し・水玉等の施された厚手鳥の子紙で、極めて美麗である。  
箱書等より、宝永六年（一七〇九）前後の染筆であることが知られる。

②⑤ 松平吉邦所用 素槍

無銘 二振

九代 松平

宗昌 むねまさ

越前松岡藩主昌勝の第三子。延宝三年（一六七五）六月松岡に生まれる。幼名仙鐵。元禄六年（一六九三）七月、昌勝の卒去に伴ない、名を昌平と改め、松岡藩を継いだ。しかし、享保六年（一七二一）十二月四日、本藩福井の八代藩主吉邦が歿したため、幕命により福井九代藩主に就任することとなり、松岡領を併せて三十万石を領し、將軍吉宗の諱の一字を賜わって、名を宗昌と改めた。

享保九年（一七二四）四月二十七日、五十歳で江戸常磐橋藩邸に歿す。

②⑥ 松平宗昌筆 「元旦」の詩歌幅

一幅

②⑦ 右 同 「中秋」の詩歌幅

一幅

②⑧ 楊心流胸譯図

二卷

絹本墨書一部着色。前・後二卷よりなる針灸の極意書と思われる。巻中に「謹上 越州大守源宗昌殿君 閣下」とある

から、当時有名の針灸師佐藤翁之丞公豊より、福井九代藩主松平宗昌に伝授されたものである。

②⑨ 兵法関係書付並びに絵図類

一包

九代藩主宗昌が、松岡藩主時代に研鑽した兵法関係の書付や絵図類で、松岡藩軍帳や各種軍学書写本類が含まれている。

十代 松平

宗矩 むねのり

正徳五年（一七一五）、福井藩祖結城秀康の曾孫松平知清の子として江戸に生まれ、九代藩主宗昌の養子となり、宗昌の逝去後、享保九年（一七二四）十代藩主となる。

宗矩の在任中、領内には大火・風水害などが続発し、飢饉が相次いで藩財政は窮乏した。飢饉に苦しむ細民が城下を群行して（緞虫・蓑虫などと称した）動揺したが、宗矩は家中領民に儉約令を発して貯蓄を奨励し、藩米を放出して餓死者の出るのを防ぐなど懸命に対策を講じ、名君として伝えられている。「徳正君御出語」は、そのすぐれた行状を記録したものである。

寛延二年（一七四九）、三十五歳で歿した。

③⑩ 松平宗矩筆 「寿老人」「松鶴」「竹鶴」の図 絹本着色

三幅

③⑪ 右 同 「鶴舞千年樹」の書幅

一幅

③⑫ 「論語」「小学」写本

四冊

いずれも包紙表に「若殿様へ進めらるべき思召にて、御自筆にて遊ばされ置候なり。」との上書がある。「小学」には、寛延二七年<sup>一七五</sup>の年記があつて、宗矩が死の直前（この年三十五歳で歿した）に書写したものであることが知られる。

③⑬ 刀術月夜集

三冊

十代藩主松平宗矩の自著で、延享四年（一七四七）五月付



の序文がある。宗矩は、衰退の兆を見せはじめた藩政回復のため、懸命の対策を講ずるなど、名君として伝えられるが、同時に極めて学問好きで、その研鑽振りを示す史料が数多い。

この著述もその一つで、宗矩の博識を物語っている。

③⑤ 松平宗矩所用 十文字槍 無銘 一振

## 十一代 松平 重昌

一ツ橋宗尹（八代將軍吉宗の子）の長子。寛保三年（一七四三）九月、江戸一ツ橋邸に生まれる。十代藩主宗矩に子がなく、延享四年（一七四七）六月、宗矩嗣子を徳川一族の中から求めることとなり、幕命を以って宗矩の養子となる。寛延二年（一七四九）十月、宗矩の逝去に伴ない、七歳の幼さで十一代藩主を相続し、將軍の諱を賜わり、越前守重昌と称した。

新藩主襲封に伴ない、福井城下の町々では祝宴を催し、新藩主治政の前途を祝したが、若年のため、ついに入国を果すことが出来ぬまま、宝暦八年（一七五八）三月十八日、十六歳で江戸常磐橋藩邸に歿した。

③⑥ 松平重昌筆 「花明五嶺春」の書幅 一幅

③⑦ 松平重昌幼年期着用 緋色錦具足下袴 一着

## 十三代 松平 治好

明和五年（一七六八）福井十二代藩主重富の子として江戸に生まれ、寛政十一年（一七九九）家督を相続、十三代藩主となる。

文化元年（一八〇四）、藩医達の申請した医学研究所の設立

を許可し、同六年には土居の内に敷地を与えて開館させ、薬草園を併設した。これが濟世館で、幕末全国にその水準を誇った福井の医学興隆の基礎となったものである。一方では、相次ぐ城下での大火、江戸藩邸の類焼などと相まって、藩財政は次第に窮乏し、また太田平乗寺（福井市太田）の住持功存の著「願生婦命弁」から端を発した、西本願寺宗意騒動など城下の擾乱も少なくなく、その在任中は多難であった。文政八年（一八二五）五十八歳で歿した。

③⑧ 松平治好筆 「渭水東流去」の書幅 絹本墨書 一幅

③⑨ 右 同 「松下問童子」の書幅 絹本墨書 一幅

④⑩ 右 同 幼年期揮毫の書 三葉

④⑪ 松平治好夫人定姫筆 和歌の幅 一幅  
十三代藩主治好夫人定姫は、田安中納言宗武の女、天明七年（一七八七）治好に嫁した。父田安宗武は、八代將軍徳川吉宗の次男で、御三卿の一家田安の初代であり、国学の造詣深く万葉調の歌人として著名であった。

定姫は父の影響下に向学の氣風旺盛で、書画に秀で、多くの作品を残した。

④⑫ 右 同 「牡丹に軍鶏」の画幅 絹本著色 一幅

④⑬ 右 同 「鴛鴦」の画幅 絹本著色 一幅

④⑭ 翁模様緑色革製文庫入 定姫遺品類 一箱  
十六代藩主慶永（春嶽）が、実家田安の親族より贈られ、保存していたものである。定姫は十三代藩主治好の夫人であると同時に、田安家の出身であったから④⑬の人物解説参照、春嶽の手許に遺品が届けられたのである。

文庫内には、左記の品々が収められている。  
一、老松模様錦帙入

硯 銘「干渴」 一面。筆 一軸。

銀墨置 一個。古梅園製墨 一丁。

二、革包入真鍮製物指 銀梅ツマミ付 一点。

三、革覆付 日時計 一点。

四、革製火打袋。火打石、火打金入。 三点。

五、「千字文」豆本 一冊。

六、黒檀印章箱。印章・肉池・印譜等入。 十点。

#### 十四代 松平 齊承

（なりつぐ）

十三代藩主治好の三男、文化八年（一八一二）二月十一日、福井城に生まれる。幼名仁之助。文政七年（一八二四）、江戸城で元服、十一代將軍家齊の諱を賜い、伊豫守齊承と称し、同九年正月二十三日、家督を相続、十四代藩主となり越前守齊承と改めた。

文政十年、福井へ初入国した齊承は、藩財政の窮乏を救うため、五ヶ年間の儉約令をしき、借米のため困窮している家中に対しては貸札を許すなど、様々の施策を放った。しかし、文政十一年、藩は東叡山火の番を命ぜられ、その翌年には靈岸島中屋敷が類焼し、更に凶作、疫病の流行など大幅な出費が重なり、財政の窮乏は一向に解消されなかった。天保六年（一八三五）閏七月二日、病のため二十五歳で歿す。

#### ④⑤ 松平齊承幼年期揮毫の書

三葉

#### ④⑥ 松平齊承夫人浅姫所用 薙 刀

一振

銘 上野□平藤原国常。金梨子地葵紋蒔絵 赤銅魚子地葵紋唐草模様金具付鞘付属。

#### 十六代 松平 慶永（春嶽）

（むねなが）

文政十一年（一八二八）九月二日、徳川宗家の親族、御三卿の一家田安齊匡の八男として生まれた。

天保九年（一八三八）十一歳の時、越前松平家の養子となり、福井十六代藩主に就任した。当時藩は財政難にあえいでおり、慶永は若くして藩財政立直しに着手し、本多修理・中根雪江・鈴木主税・橋本左内等を登用し、熊本の横井小楠を招いて政治的手腕を發揮した。さらに若い藩士に洋学教育をすすめる、時代の動きを感じ取らせ、王政復古に際し、それらの人々は重大な役割を果たした。

藩外では、日本が攘夷か開国かという重大問題に直面し、尊皇敬幕で開国論を唱えた慶永は、老朽化した幕政を雄藩連合により改革し、朝幕融和をはからんとした立場をとり、同じ開国論者ではあったが、譜代大名だけで幕権をさらに伸ばそうとする立場をとる井伊直弼等と対立、ことに將軍継嗣問題をめぐって激突し、安政五年（一八五八）井伊直弼が大老となるや、慶永は隠居謹慎の身となった。

しかし、井伊大老の死後、再び政界に復帰し、政事総裁職に任ぜられ、朝幕の間に立って維新回天の大業に貢献した。島津久光・伊達宗城・山内容堂と並び、幕末の四賢公と称せられる。

明治二十三年（一八九〇）六十三歳で歿した。

#### ④⑦ 松平慶永肖像画

波々伯部捨四郎筆 絹本着色 一幅

#### ④⑧ 「嗣子茂昭拝・侯爵・喜て賦」の詩並びに和歌の幅

双幅

福井藩最後の藩主となった松平茂昭は、明治十七年七月伯爵を授けられ、更に明治二十一年一月十七日に至って、養父慶永（春嶽）の功績により侯爵に昇叙された。この書幅は、

慶永が嗣子茂昭の侯爵昇叙を喜んで賦した詩並びに和歌を揮毫したものである。

④9 松平慶永筆 「春日同詠貴賤迎春歌」の和歌幅 一幅

⑤0 松平慶永一族寄書の幅 一幅

明治十二年正月に、当時の松平家一族の人々が寄書した、いわば書初の幅である。松平慶永（春嶽）・同茂昭・茂昭の嫡子康莊、及び慶永夫人勇子・茂昭夫人幾子・慶永の女のうち康莊夫人となった節子の六人が、それぐ揮毫している。

⑤1 松平慶永夫人勇姫所用 源氏物語 一揃

金梨子地菊水模様蒔絵の華麗な箱に収められた源氏物語で、各書冊の優美な装幀とともに、江戸末期の代表的美術工芸品である。

梨子地肌の随所に、九曜紋のかたちに金粉を抜いた箇所があることから、熊本細川家より慶永（春嶽）の許に嫁した勇姫の輿入道具の一つと思われる。

⑤2 右 同 供揃行列用 素槍 二振

銘 越前住下坂 近江守藤原継広。金葵紋蒔絵鞘付属。

⑤3 右 同 所用 薙刀 二振

銘 寛文六年八月 於摂府城下作之 栗田口近江守忠綱・

上野介源吉正。金唐草模様九曜紋蒔絵鞘付。

## 十七代 松平 茂昭

天保七年（一八三六）越後糸魚川藩主松平直春の子として生まれ、安政四年（一八五七）糸魚川藩一万石の藩主となる。はじめ直廉と名のり巽嶽と号した。

安政五年（一八五八）七月、井伊直弼との政争に敗れて隠居急度慎を命ぜられた松平慶永（春嶽）のあとを継いで、福

井十七代藩主となる。幕末、激動多難な中に、よく藩を治め、政局の中心にあった養父慶永をたすけた。しばぐ国政に参加して建議し、長州征討にあたっては副将として出陣、また会津征討にも藩兵を指揮した。

維新後、進んで版籍奉還を行ない藩知事となり、侯爵を授けられ、明治二十三年（一八九〇）七月、五十五歳で歿した。

⑤4 松平茂昭肖像画 波々伯部捨四郎筆 絹本着色 一幅

⑤5 松平茂昭筆 「柳岸花汀夕照水云々」の書幅 一幅

⑤6 松平慶永・同茂昭追悼の和歌短冊帖 二帖

明治二十三年（一八九〇）に、相次いで逝去した松平慶永（春嶽）・同茂昭の葬儀などの際、弔問した友人・旧臣等が霊前に供えた弔歌短冊を折本に仕立てたものである。

池田茂政・松平確堂をはじめとする旧諸侯、勝海舟・佐々木弘綱・同信綱等の知友、村田氏寿・由利公正等旧臣達などが収められている。

⑤7 松平茂昭所用 片鎌槍 一振

銘 越前住播磨大掾藤原重高

⑤8 大 礼 服 一式

## 武器類

### ⑤9 魚鱗具足

福井藩御抱甲冑師明珍吉久の傑作である。魚の鱗形の小札を多数組合せて、伸縮自在の精巧さを持ち、家門筆頭の福井藩主の武威を示すにふさわしい甲冑として、古来名高いものである。延宝二年（一六七四）に歿した二代目吉久の作と伝えられる。

### 〔明珍吉久〕

古来甲冑師として名高い明珍家は、平安時代末から鎌倉時代初期に活躍した増田宗介が初代である。宗介は十二世紀中頃、近衛天皇からその作品が玉のように明るく輝き、見事な珍品であるとして「明珍」の姓を賜わったと伝えられる。その後この明珍家の一族は、室町時代中期の全盛期から明治に至るまで、全国に広がって多くの名工を生んだ。但し、江戸時代に入って甲冑の需要が減ると、刀や鐔、各種調度品類なども製作するようになる。

福井の明珍吉久は通称小左衛門といい、明珍一派の一支流である。代々小左衛門吉久を名乗り福井藩に仕え、藩主の命で甲冑・鐔をはじめ種々の鉄製品を作った。殊に二代目吉久は、今日も松平家に蔵する魚鱗具足をはじめ、英国の博物館に収蔵する驚の置物、松平家より明治天皇に献上された龍の置物等、傑作が多く著名である。また六代目吉久（文化六年〇九八）は、浜小左衛門と人々に嘲られたが、鐔を彫っては当代随一と賞讃された名工であった。

### ⑥0 鉄錆地塗魚鱗形小札

明珍吉久作の魚鱗具足（⑤9参照）の残片で、現存以外にも同種の具足が伝来していたことが知られる。

十五片

それ／＼の裏面に、金泥で左右「御脇板」「御前胴五枚之内」等の注書が施され、各小札を相互に接続する金具が残存している、伸縮自在の絡線を知ることが出来る。

### ⑥1 兜吹返

赤銅魚子地唐草模様 金銀日月象嵌

一對

### ⑥2 鉄製金象嵌 鳥翼形具足残片

一点

### ⑥3 薙刀

一振

銘 元禄三年二月吉日 長曾祢興正作之。

長曾根興正は、江戸期を代表する刀工長曾根興里入道虎徹の門人で、のちその養子となった著名工である。

### ⑥4 薙刀

一振

銘 葵紋 康継於越前作之

### ⑥5 薙刀

一振

銘 藤原是一作。

### ⑥6 葵紋付緋色羅紗製 薙刀袋

一点

### ⑥7 「月剣」槍

一振

伝三條小鍛冶作

### ⑥8 袋 槍

一振

伝南蛮渡来

### ⑥9 十文字槍

一振

銘 山城大掾藤原国次

### ⑦0 十文字槍

一振

銘 越前住上総大掾藤原宗道

### ⑦1 福井藩主供立行列用飾槍

二振

黒羅紗張り鞘付き

### ⑦2 小刀

一振

銘 長曾祢興里入道虎徹

虎徹は、津田助広・井上直改等とともに、江戸時代を代表する名刀工である。近江国（滋賀県）長曾祢村で生まれ、福井に移り住んで甲冑工の技術を修業した。のち江戸に出て刀工として名を高めたが、刀や槍では切れぬ甲冑の鋼鉄を鍛えることを修得しただけに、刀を鍛えても卓抜した切味の名刀を生み出したのである。

また彫物が得意で、この小刀にも金象嵌で「独結付剣に草の俱梨迦羅龍」を彫りこんでいる。

⑦③ 細銘小刀

小刀とは、小柄を装着して大・小刀の鞘にはめこみ、紙を切るなどの日常の用に供したもので、今日のナイフに相当するものである。

この小刀は、刀身に「仙台初見五城楼」「松竹梅」等の詩歌を、細字で彫刻していて珍しい。

⑦④ 越前家御抱鍛冶作 小刀 八振

(イ) 銘 葵紋 康継 (福井)

(ロ) 銘 播磨大掾藤原重高 (福井)

(ハ) 銘 菊紋 一国清 (福井)

(ニ) 銘 伊勢守藤原国次 (松岡)

(ホ) 銘 以南蛮鐵 河内守藤原義植 (一乗谷)

(ヘ) 銘 近江守藤原繼広 (康継弟子)

⑦⑤ 赤銅魚子地金桐紋付 小柄 一点

⑦⑥ 鷹狩用 小刀 一振

銘 高来。柄・鞘 紫檀製。銀魚子地金具付。

⑦⑦ 鷹狩用 小刀 一振

無銘。柄・鞘 紫檀製。銀魚子地菊花紋金具付。

調度品類

⑦⑧ 鉄製 龍置物 (大) 一点

福井藩御抱甲冑師明珍吉久(⑤⑨の人物解説参照)は、甲冑鎧類等すぐれた武器を製して著名であるが、その技法を生かして様々の調度品をも作り、今日に伝えている。本品より

⑧①に至る置物・文鎮・香炉等がそれであり、いずれも極めて精緻な技術が結集され、見る者の目を驚かせる。

⑦⑨ 鉄製 龍置物(文鎮) (小) 一点

御抱甲冑師明珍吉久作

⑧② 鉄製 海老置物(文鎮) 二点

御抱甲冑師明珍吉久作

⑧① 銅製 海老香炉 明珍作 一点

⑧② 唐金製 鳳凰飾金具付花籠形花生 一点

⑧③ 草花模様錦 卓子掛 一枚

⑧④ 葵紋散菊花唐草模様蒔絵 重箱 一点

⑧⑤ 葵紋散桐花唐草模様蒔絵 色紙箱 一点

⑧⑥ 葵紋散菖蒲流水模様蒔絵 御目録箱 一点

⑧⑦ 黒漆地金葵紋蒔絵 硯箱 一点

⑧⑧ 村梨子地葵紋蒔絵 煙草盆 一点

⑧⑨ 黒漆地金泥鶴亀流水模様木盃 一点

厚手木地に黒漆を施し、金泥で鶴亀流水模様を描いている。箱書に、甲斐の武田氏所用のものであった旨、注記がある。

⑨⑩ 素焼 土瓶 一点

## その他の什宝類

- 八代將軍徳川吉宗所用  
 ⑨1 青地錦小型巾着入 虎の爪 一点  
 八代將軍徳川吉宗所用
- ⑨2 光格天皇御所用 御扇子 二握  
 円山応挙筆。秋草模様雄鹿の図並びに蟻螂の図。
- ⑨3 太田道灌所用 琵琶 銘千鳥 一点  
 福井藩老太田安房守から初代藩主結城秀康に献上されたものと伝えられる。福井藩士太田安房守家は、太田道灌七代の子孫資武の時、秀康に召出され、三千石を給されたのに始る。のち知行六千石まで累進したが、福井藩領が半減した所謂「貞享の大法」に際し、浪人となった。
- ⑨4 福井歴代藩主座像（神像） 三体  
 福井城内或は江戸藩邸内の祖霊殿中に奉祀されていたものと思われるが、各像がどの藩主に相当するかは不詳である。
- ⑨5 福井歴代藩主所用 印章類 五十顆
- ⑨6 福井歴代藩主所用 具足下袴 五着
- ⑨7 葵紋繡錦御守袋 二点
- ⑨8 桂袴 一式  
 明治期、松平家の婦人が着用した女房装束である。江戸末期の女性用暗の装束である小桂姿が変化したもので、明治期女子の大礼服でもあった。また、貴族の婚礼の際にも用いられた。
- ⑨9 爆竹調馬の図絵 一卷  
 絹本着色。福井藩正月の著名行事「馬威」の様子を描いたものである。筆者は不詳であるが、人々の表情や動きが見事に再現され、非凡な筆力をうかがわせる名品である。  
 馬威は、毎年正月十五日黒紋付に襷懸といった定式の服装の青年藩士が、愛馬に鞭をいれ街路を疾走し、これを町・農家の若者が鉦・太鼓を打鳴らしつつ攻めふさぎ、勇壮な競合いを展開したもので、藩士の馬術練磨、軍馬の鍛錬を目的としたばかりでなく、士庶の融合をもはかった一大行事であった。
- ⑩0 福井城郭各御門其他見取絵 一卷  
 維新前の福井城各要所の風景を、淡彩で写生したものである。筆者等一切不詳であるが、今日「福井城旧景」と題して数種の写本が伝えられているものの、原本と推定される。
- ⑩1 福井温故帖 一帖  
 明治十七年三月、旧福井藩士の寺島知義・村田氏寿・矢島立軒・南部広矛・毛受洪等が揮毫した書画を、折本に仕立てたものである。
- ⑩2 將軍徳川家御歴代御印章写 一帖  
 幕臣宮重信愛が、維新後歴代將軍の文書を収集し、その印章部分を影写したものである。
- ⑩3 二代將軍徳川秀忠筆 和歌色紙 一幅
- ⑩4 五常の和歌色紙 五点  
 仁・義・礼・智・信を題とする五首の和歌で、筆者はそれ／＼醍醐大納言忠順・冷泉中納言為理・久世前宰相中将通熙・今城中納言定国・八條前大納言隆祐である。松平春嶽の由緒書によれば、春嶽が六條少将より行末長く身の守りとなすようとの趣旨で、贈られたものであるという。
- ⑩5 「福代よりかはらぬ春の云々」の和歌等 巻軸 一卷  
 時代は不詳であるが、同一時期の藩主及びその一族の手書

を、一卷にまとめたものと思われる。料紙は生漉鳥の子で、打雲や各種模様漉掛けなど、華麗な技法が施された江戸時代の代表的越前和紙である。

⑩⑥ 唐獅子の図

一点

紙本墨彩。狩野広信筆の唐獅子で、もと大衝立に仕立てられていたものと思われる。

⑩⑦ 「城取極意九箇條」の目録

一卷

福井藩軍学者明石甚左衛門房弘より、文化三年（一八〇六）十二月、十二代藩主重富または世嗣治好（十三代藩主）に授与された兵法極意伝授の目録である。

明石氏は福井藩の兵法家で、武田流軍学を講じた。

昭和五十三年度秋季特別展

野前平家展

― 什宝の部 ―

解説総目録

発行 昭和五十三年十月一日

編集 福井市立郷土歴史博物館

福井市足羽一丁目八十一六

印刷 河和田屋印刷株式会社

福井市一本木町八八





昭和五十三年十月一日〜十一月五日  
福井市立郷土歴史博物館

給